「滿洲國」の作家疑遲文學の一考察

――『花月集』と『風雪集』を中心に――

李　青

一　はじめに

一九三二年に日本によって、清朝の廢帝愛新覺羅・溥儀が擔ぎ出されて、「滿洲國」が作られてしまった。「滿洲國」は建國後に政治、經濟、文化などのあらゆる面において、嚴しい取り締まりに乘り出した。文學創作や作家の心象風景も極めて複雜化した。中國現代文學史の角度から見ても、「淪陷期文學」が特別な文化的性格を有していることは明らかである。

對日抵抗作家としては蕭軍、蕭紅、山丁、金劍嘯などが知られている。「滿洲國」の建國初期に當局の文化政策の甘さを利用し、抵抗運動が行われた。地下刊行物以外にも、合法的手段を用いていた。「滿洲國」の首都新京（現在の長春）で發刊されていた『大同報』に文藝副刊の「夜哨」を、哈爾濱の『國際協報』副刊に「文藝」週刊を創刊した。これらの紙面で活躍していたのは、中共黨員のほか、革命的進步的な青年作家も多く集まっていた。彼らはこれらを陣地にし、大衆を覺醒するために、日本の侵略、社會の暗黑を暴露する作品を數多く發信した。

しかし、當局の彈壓が嚴しさを增していく中で、蕭軍、蕭紅、羅烽、舒群などの抗日作家は相次いで東北を後にした。一九三四年のことである。彼らは中國の奧地へ移り住んでからも日本の暴擧を暴露し、抗日の旗を高く掲げていた。魯迅に特別に評價された蕭軍の『八月の鄕村』はその一例である。

一方で、東北に殘された作家たちの創作活動は一層嚴しいものとなり、金劍嘯はついに一九三六年に處刑された。活發な文筆活動を展開した梁山丁も、長編小說『綠色的谷』の不都合な箇所が削除される處分を受けた。彼は間一髮のところで死を逃れ、北京に脫出した。

しかしながら、日本が敗戰し、「滿洲國」が崩壞するまで東北にとどまり、文筆活動を續けた一群の作家がいたのである。彼らは時には大膽に社會の不合理を描いた。時には內容的に何かを暗喩しているような屈折的な敍述法を用いた。嚴しい取り締まりや檢閲をくぐりぬけるため、いかに細心の注意を拂い、言葉や表現を愼重にしたかを窺い知ることができる。彼らの描いた〝暗黑社會〟、〝小人物の悲運〟、〝下層社會の貧困〟から、「滿洲國」の實態を一瞥することができる。特に文藝雜誌『藝文志』に集まった「藝文志派」と名付けられた作家たちは、「滿洲國」時代の文壇をにぎわすもっとも複雜な一群だと言われている。

彼らは日本人の力を借りながら、政治からなるべく遠ざかるように生活した。獨自の「寫印主義（書くことと印刷すること）」を打ち出し、政治と一線を畫そうとしたのである。表面上は日本人と親密な行動を取りながら、文學作品では惡政に喘ぐ貧民の姿や社會の暗黑面を暴露した。彼らの創作の苦衷は、このような面從腹背に見ることができる。

「藝文志派」は同人誌季刊の『藝文志』から、名を得た。主要メンバーに、古丁、爵靑、疑遲、小松、外文などがいる。本派は文學作品の數においても、質においても、當時の文壇において、もっとも注目を浴びたグループだ

と言える。古丁の鋭さ、爵青の〝鬼才〟、疑遲の短編の齒切れの良さ、いずれも「滿洲國」という時代を書き殘してくれている。

本稿は疑遲の短編集『花月集』と『風雪集』に焦點を當てて、彼の描いた時代を探ってみたい。

二　疑遲及びその作品について

疑遲は一九一三年に遼寧省鐵嶺縣に生まれた。本名は劉玉璋である。幼少時代から青年期にかけて哈爾濱で過ごした。道外食糧工會私立職業學校、東省特別區第三中學を出てから、一九三二年に中東鐵道車務專科學校を卒業した。以後、中東鐵道に勤務していた。一九三五年七月のはじめに、「新京」に赴き、國務院統計所に就職することになった。同じ職場にいた古丁や外文と意氣投合した。三人で讀書會を創設することをきっかけにして、「藝術研究會」をスタートさせた。

疑遲は當時の氣持ちを短編小說集『花月集』（月刊滿洲社・一九三八年）發刊の序「わたしの創作について」及び晩年の回想の中で何度も振り返っている。

> われわれは苦悶している。當然、それぞれの苦悶には、それぞれの特殊な出發點があるはずだ。口を持っているにもかかわらず、われわれは〝おし〟か〝どもり〟だ。目があるにもかかわらず、われわれはいつも〝盲目〟だ。〝盲目〟でなければ、近眼か遠視だ。耳があるにもかかわらず、われわれは〝つんぼ〟だ。われわれは健全な官能を持った〝不具な人間〟だ。（中略）われわれは苦悶している。われわれは苦悶を延長するのではなく、昇華すべきだ。科學的な藝術理論は「苦悶の昇華は藝術である」ことを肯定していないが、われわれ

は苦悶の昇華は藝術とする。

「藝術研究會」は一九三六年に作られたらしい。「滿洲國」が建國して四年たった頃と推定されている。異民族による統治に對する精神的な壓迫が、疑遲の文章からにじみ出ている。苦惱している一群の若者たちの姿が映し出されている。

一九三七年、疑遲は「藝術研究會」の仲間、古丁や外文などの主要メンバーと雜誌『明明』を創刊した。こうして創作活動に身を投じることになった。彼ははじめて劉郎というペンネームで、雜誌『明明』にロシア文學をいくつか翻譯した。以後の作品創作には夷遲、疑遲というペンネームを使用したが、疑遲と呼ぶのが一般的である。雜誌『明明』停刊後、一九三九年藝文志事務所に入り、雜誌『藝文志』紙上で創作活動を續けた。一九四〇年、大衆雜誌『麒麟』などの編集に携わった。

太平洋戰爭勃發後は、政府による文藝統制政策が嚴しさを增す一方だった。一九四三年に滿洲文藝家協會の機關誌として再出發し、復刊された『藝文志』で、「滿洲國」が崩壞するまで文筆活動を續けた。一九四九年の新中國成立後に、劉遲という名前に改めた。一九五六年に中國作家協會に入り、映畫關係の仕事に從事した。新中國後にはロシア映畫の翻譯に專念したことから、翻譯家として名が知られている。

疑遲が青年時代に通った中東鐵道車務專科學校は、中國とロシアが合同で經營した學校であり、そこでロシア語を習得した。この頃から、彼は多くの文學作品に觸れ、特にロシア文學の強い影響を受けたと見られる。彼が勤務していたころ、中東鐵道はまだソ連の管轄下に置かれていたため、ソ連の新聞やゴーゴリ、ツルゲーネフ、ゴーリキーの作品を大量に讀むことは可能であった。ツルゲーネフの自然描寫に對する飾り氣のない豪放な手法や、ゴー

リキーの下層社會の人々に對して同情をよせる作風は、疑遲の作品に多大な影響を與えた。このようなロシア文學の影響もあり、疑遲の作品は「藝文志派」の中で古丁や爵青などと一味違う特色が示されている。

疑遲の創作活動は、主に一九三八年から四四年の期間に集中している。おおよそ三つの段階に分かれる。最初は一九三七年創刊の『明明』時代である。疑遲は『明明』時代にロシア文學の翻譯や作品の創作を行なった。一九三九年創刊の雜誌『藝文志』の主要メンバーとして文學創作を續けたのが次である。最後は「滿洲國」末期に政府の代辯者と化した二度目の『藝文志』を據點に「滿洲國」終焉までペンを取り續けた。

疑遲の主な創作は、三つの短編集に集大成されている。『花月集』(前出)、『風雪集』(益智書房出版・一九四二年)、『天雲集』(藝文書房出版・筆者未見)である。うち『花月集』は一〇編、『風雪集』は一一編、『天雲集』は八編、合計二九編の短編がある。このほかに中編小說「雪嶺之祭」(『學藝』第二卷・益智書房出版・一九四二年)、長編小說『同心結』(藝文書房出版・一九四三年)などがある。

東北淪陷期文學研究家の上官縷氏の紹介によると、[1] 疑遲は長編小說『松花江畔』を新聞に連載したものの、出版するまでには至らなかった。內容の一部を「江城」という題で『滿洲作家小說集』に載せたという。

疑遲の小說は鄕土の息吹が漂っているという特徵から「鄕土文學」の先驅者とされた。疑遲が『明明』に發表した「山丁花」は、社會に注目され、當時の文壇では政治立場及び文學主張の相違によって、對立していた〝文叢文選派〟の梁山丁からも絕贊のエールを送られた。梁山丁は「山丁花」の書評[2]を『明明』に寄せ、疑遲の「山丁花」を「鄕土文藝を代表する作品である」と高く評價した。以來鄕土文藝をめぐって、「滿洲文壇」では「鄕土文藝論爭」まで卷き起こった。

「山丁花」の創作について、疑遲は自分の胸中をこう告白している。[3]

一九三四年春のことであった。車務專科を卒業後に東部線の烏吉密河驛へ實習に行かされた。ある小雨が降りしきる朝、ボロボロの綿入れを着て、大きな荷物を擔いでいる九人の勞働者風の人が三等待合室を徘徊しながら、驛員に葦河までの切符の値段を訪ねていた。

驛員が葦河までの三等汽車賃を一枚二・六圓だと告げると、苦難に滿ちた數人の顏には驚愕と失望が現れた。三分後、彼らは相次いで三等待合室を後にした。あれ以後私は再びこのような旅人に出會った。同じボロボロの服に背中に荷物と斧を擔いで……失望の目つき、疲れ切った表情から彼らの旅路の辛苦を感じ取った。

彼らは半年もの間木を伐採していたのに、手元にいくらも錢が殘っていない。または職人の技術をもっていても、活かす場所は見つからない。年々苦勞し、結局いずれもただ働きで終わった。窮地に陷った彼らは再び灰色の故郷に戻るしかない。

今年の春の四月にのどの病氣を患った。西四道街のある家で靜養していた。病中はどうにもやるせなくて、三年前の日記をめくっていたが、趙永順、張德祿（『山丁花』の主人公の名前―筆者注）などの姿が頭をよぎった。數十年たっても變わらぬ環境下に置かれた東北には、待合室を徘徊する張德祿のような人が恐らく他にも多數いるだろう。これらを書く必要があると感じた。

「山丁花」は極寒の東北荒原を背景にしている。張德祿、趙永順など一群の農民は、生計を立てるために原始林に入り、自分の勞働力を賣って、材木を伐採した。しかし、懸命に一冬頑張っても、歸鄕の汽車賃さえ拂えなかった。疑遲は社會の最下層に生きる勞働者を如實に描いた。

疑遲の作品を概觀してみると、多くの作品は苦しい生活の中で喘ぐ下層社會の人々の姿が多く見られる。彼は

『風雪集』の後書きに、「創作の題材は始終私の體驗したこと、私の熟知した人物の領域を超えていない。したがって、坊ちゃんやお嬢さんの煩惱、上流社會の苦悶は私自身が書きたくないのだ」[4]と記している。上流社會の苦悶よりも、下層社會の人々の苦しみに多大な同情を與え、それを文學作品に盛り込み訴えるのが疑遲の始終一貫した創作姿勢かもしれない。このほかに市井の小人物の姿や消沈失意した都會人も、疑遲によって生き生きと描かれている。

三　『花月集』と『風雪集』

疑遲がはじめて上梓した小説集は、一九三七年に出版された『花月集』である。『風雪集』は五年後の一九四二年に出版された。創作にあたり、彼は『花月集』のなかで（「私の創作について」）、自分の苦悶した氣持をこう記している。

これまで長い間、私はつまらない妄想に魂が囚われたかのようだった。何とか自分の神經を麻痺させるために、藥を飲み、このような荒野のような嚴しさを追い拂おうとした。しかし、これは私の精神的にも肉體的にも何の利益ももたらさない。ただただ心身とも無限の苦痛を感じるだけであった。（中略）同時に私の耳には寒さで凍えそうになった哀れな叫びが響いている。心の中の疑惑と藥の副作用も加わり、私はまるで谷底に陥れられたような氣持ちであった。（中略）だが、誰がこのように生き續けたいだろうか。

この苦惱が侵略に由來していることは容易に想像できる。疑遲は晩年の回想錄で、この苦悶の原因を明らかにし

ている。[5]

仕事が終わり、日が暮れると、私達（疑遲、古丁、外文のこと—筆者注）はお互いの家を訪問した。仲間が訪ねて來ると、喜んでもてなした。何のご馳走もなかったが、外で炒り大豆を買ってきて酒のつまみにした。酒が入ると、話が彈む。「……この溝はまさに兩民族の間の溝だ。これは大和民族からくる優越感のせいだ。多くの事實はこれを證明する。例えば、教育の設備や商品の供給など……この溝は血と肉を持った人間なら、誰だって反感を持つ。平氣ではいられない！」と長吉（古丁のこと—筆者注）は、顏が眞っ赤になった庚生（單庚生は外文のこと—筆者注）に向かって挑むような目付きで言った。「そうだろう。單兄さんよ。」

「あれは溝ではない。格差だ。主人と奴隷、征服者と被征服者の間には、このような格差があるんだ。當たり前のことだ。話しても無駄だ。」と庚生。

疑遲の『花月集』と『風雪集』は、創作の題材から四つの方面に分類することができる。

第一に、大半を占めているのが下層社會でもがく貧しい人々、彼らに苦痛を與える惡勢力などを題材にしたものである。

「彼の創作は關東の黑い大地と廣々とした荒野によってはぐくまれたため、常に樵夫、轉轍手、獵師などが、密林で生活を營む者の運命に注目している。故に〝純文學〟のジャンルにおける彼の小說には、黑い大地に息づく關東人の本質、生命力が十分に表現されている。[6]」と東北淪陷期文學の研究者黃萬華氏は見ている。

『花月集』の第一篇の「拓荒者」では、三〇數年前に開墾された土地に、趙大叔一家や若者の姜坤などが住んで

いる。彼らは勤勉に働き、先祖が殘してくれた土地を守り抜こうとしたが、洪水が無情に襲ってきた。決壞した堰を自分の身體で塞ごうとする姜坤、誠實で溫厚な趙大叔一家及び村……、一瞬にして、洪水の猛威に飲まれてしまった。滔々として流れている川の水はあたかも人々の憤懣を表しているかのようであった。

「江風」は漁師福子は借金が返せず、貸し主に妻を抵當にした。福子との幸せな生活に執着する妻は不幸な死を遂げる。不幸は常に弱者に訪れる。

「北荒」は農業を營んでいた胥昌夫婦が町に流れ込んだが、夫の胥昌は煉瓦工場で加重勞働によって事故死をした。ろくに補償金がもらえなかった未亡人が工場の親方に付きまとわれる。途方に暮れる未亡人は幼兒を連れて、實家に向かう。將來を息子に託す未亡人は、生きるために道中さまざまな苦難を乘り越える。しかし、災難は再び忍び寄る。心の唯一の支えとなっていた息子は、匪賊の襲擊によって命を奪われてしまった。

「月は沈んだ」は二百世代あまり續く施家堡で發生した悲しい物語である。欲張りの村長は自衞團の團長と結託して、外國映畫を見ることを口實にして、一世帶に二元ずつ強制的に負擔させることにした。作品は夫を亡くして極貧狀態に陥っている來福嫂一家に焦點を當てて、ストーリーを展開している。彼女は一六、七歲の息子金升と八歲の娘小香と愼ましく暮らしている。生活はまだ半人前である息子金升が、日雇い勞働で稼いだ食糧で何とか凌いでいる。しかし、映畫の分擔金が拂えなかった來福嫂一家は、無理矢理殘りわずかの米を取られてしまう。飢えに飢えた來福嫂は病氣で寢込む。空腹の母と妹を見かねた來福は追いつめられて無謀にも、穀物倉庫に盜みに入ることを思いついた。終わりはこう結ばれている。

突然、荒々しい叫び聲とせわしげな走る音が來福嫂が待っている長い靜寂を破った。彼女は胸がどきどきし、

身體が痙攣を起こした。叫び聲がますます近く、走る足音が聞こえ、響いている。彼女は戰々恐々としてベットから降りて、震えながらドアに近づいた。不幸が降ってくるのを默って受け入れようとしていた。

作者は「荒々しい叫び聲」や「走る足音」などにより讀者に緊迫感を與えて、來福嫂一家に降りかかってくる不幸を豫告している。

「豐作の夜」は、地主の齊三爺が村の有勢者などを集め、豚を殺して自宅で豐作の祝い會を催した。全員がほろ醉い機嫌の眞っ最中に、「泣きわめく聲と聲を荒げて罵る聲が聞こえてきた。泣き聲は悲しさと淋しさがにじんでいる。しかし、粗野な罵倒はいっそう激しくなった。」それは作男の黃老二が延びに延びた未拂い金の返還を求めにきたのである。齊家は賃金の支拂いを拒否し、黃老二を亂暴に追い返した。作品は金持ちが豐作に醉いしれている最中に、この插話を巧みに書き入れている。豐作の年を喜ぶのは金持ちのみであり、貧しい人々にとっては、貧困生活は何の改善もされないということを讀者に訴えている。

これら社會の最下層に生きている人々を題材にした小說は、いずれも彼らの苦況と悲運を描いている。その原因を問いつめる表現が乏しいようであるが、時代背景から人々に災難をもたらした原因には、自然災害よりも人爲的な災禍を連想させるであろう。

第二に、疑遲の作品に〝匪賊〟を扱う作品が數篇ある。〝匪賊〟と言えば、〝殺人〟、〝放火〟、〝略奪〟、〝殺戮〟などの行爲を伴い、人々に恐れられている存在である。しかし、疑遲が描いた〝匪賊〟はけっしてぞっとするような恐ろしい面相の人物ではない。彼らの背後に隱されていた社會背景をしばしば考えさせられるのである。

「鄉仇」はこのような一篇であると言える。農民劉斌升は、ある吹雪になる寒い夜に村の旅館にひっそりとやっ

てきた。彼は銃を身につけていた。「長年の憎しみを晴らすため」であった。父は地主の馬に追いつめられ、死を遂げた。行き場を失い、窮地に追い込まれた劉斌升は、ついに〝匪賊〟の金山龍の下に身を寄せた。以來〝匪賊〟となった劉斌升は、「この手で數え切れない土豪劣紳の命を終結させた」。しかし、村に戻った劉斌升は父を死に追いやった敵の馬が、すでに死亡したことを知った。その息子から仇を討とうとして、馬宅に潜入したが、偶然にも取り立てに來た債權者にひどくいびられて、妹まで強奪されそうな場面に出くわした。「窓に寄りかかっている劉斌升はもうみていられない。ここ十數年外でやったことを、けっして忘れていない。金山龍の言っていることも心に刻まれている。（中略）今晩ここまで來た本來の目的はもうどうでも良い」。そこで劉斌升は迷いもなく、債權者を銃殺し、馬と馬の妹を救出した。

劉斌升が「金山龍の言っていること」を思い出すことによって、復讐する本來の行動を理性的に自制したことに注目したい。〝匪賊〟の頭である金山龍は、決して一介の山間に出沒している強盗ではないことを暗示している。劉斌升の取っている行動から見ても、單なる血緣者の仇を討つだけではなく、廣い意味での「反抗」に轉じることも考えられるのである。

ホロンバイル草原を題材にした「塞上行」には、上記の作品と同じ魅力が感じられる。

物語はホロンバイル大草原で展開する。漢民族の劉進は、蒙古族のイリジャタイに仕えて、放牧生活を送っている。實は謎に包まれている劉進だが、大草原に流れてきたのには譯があった。「あの年から大水が出るわ、反亂が起こるわ、ちょうどまるまる一三年、雅魯河、羅鍋山、朱家坎子一帶上を下への大騒ぎの中を逃げ出した。（中略）彼は心の中でこうつぶやき、昔を思い出すと、心がずきずき痛むのを感じた。家の飼馬糟の下に埋めた物を思い出すと、顔にまで慚愧の色が表れる。數々の過去の影像はなかなか消えにくい」。

水害による反亂の慘敗から草原に逃れ、素性を隠した劉進はひたすらに復讐の機會を狙っていた。臥薪嘗膽の思いが見られる。「〈虎には虎の魂〉とかいう。三〇何歳と言ってもまだ若い！べらぼうめ！あの血糊の付いた着物を脱いで、この味のない炒米飯を食べねばならぬとは！いや、きっと故郷に錦を飾って歸る日があるさ。そして俺を見そこなったことを知らしめてやろう！」

黑龍江から馬を買いに來る王振海は、黑龍江で洋館の建築を請け負っていた時に、人夫賃を着服していた。草原に來てまもない頃、砂金掘りに行って家を留守にしていた賈奎の妻に暴行をはたらいた。屈辱に耐えかねた賈奎の妻は自殺に追い込まれた。惡業がばれて、去っていく王振海を、劉進はついに馬飼糟の下に隠し持っていた物を掘り出し、疾走の旋風のように追っかけて行く。こうして、剛直な劉進は、ついに復讐を成し遂げたのだった。

第三に、都市生活を描く作品である。

まず『風雪集』の第一篇「黄昏の後」を見てみよう。「黄昏の後」は疑遲の友人の書いた「黄昏」に基づいて改編された佳作である。舊作ではある夜間學校に通う青年が、いつも兄のために酒を買いに行き、そこで酒の愛飲者數人の客と知り合った。夕方になるとこの町で金と酒のトラブルが絶えないことが描かれている。町の一風景として、賣春婦の姿も登場している。

しかし、疑遲の手によって改編された小説は、社會の下層に生きる女性の姿を主人公に仕上げた。煙草工場で働く女性勞働者は工場監督に誘惑され、亂暴された。この後、貞操を失ったことを理由に解雇されるストーリーになっている。歡樂街の一角の飾りつけとして賣春婦を登場させるのではなく、下層社會で女性がいかに虐げられているか、彼女達の苦しみ、社會の不平を訴えるのが疑遲創作の特色の一つである。

このほかに都會の頽廢生活に蝕まれた人々の姿の描かれた小説も少なくない。先の見えない生活の中で苦悶する

知識人がひときわ目立つのである。

『花月集』に收錄された「西城柳」と「失われた光」は、都會に住む知識人の苦境を告白している。「西城柳」では、專門學校時代の同級生高が、學生時代に優等生だったが、學費の工面ができずに學校を中退してから、貧しさの故に小さな豆腐屋の小作人に甘んじる姿を描いた。「失われた光」では、裕福なサラリーマン守正が妻を亡くし、娘と二人暮らしを送っている。精神的な空虛さのあまり、酒浸りの毎日を過ごしている。はてしない苦悶の中から拔け出せない一人の都會人の姿が浮き彫りにされている。

『風雪集』では、現代「滿洲」社會の各角度から、その歪みを描いているものが多い。

「クリスマスの風雪」では、若い牧師姜は趙牧師の娘を騙し亂暴した。敎會の外國人の牧師は、敎會の名譽を守るために、罪を犯した姜に對して何の處罰も加えずに放任する。小說の最後に描かれる外國人牧師の赤裸々たる祈りから、彼の虛僞、自己中心性及び彼が唱えている敎義の欺瞞性を感じずにはいられない。

「呼び鈴」は小學校敎員の〝私〟が賭博に手を染め、破滅への道に轉落していく姿が描かれている。

「浪淘沙」は玩味する價値に値する一篇である。〝私〟とV君は北の邊境に旅行に來ている。しかし、目にした街の樣子は、「多くの店舗に看板が掲げられてない。商賣をしている連中は、粗野な言葉を操っている。本は靴屋または藥屋の端っこに數冊しかなく、僞人參は町中に溢れている。（中略）街では白いズボンを履いた朝鮮女性をよく見かける。やせ細った身體に、重そうな荷物が背負われている。袋に入っている水稻は、彼女らが苦勞というほどではなさそうに運んでいる」というものだった。

このような「文化」と「藝術」のない街にたどりついた私とV君は、酒場で「酒」と「女」で神經を麻痺させることを選擇した。しかし、目の前に立っている娼婦は、何とかつての同級生だった。成績もよく理想を胸に抱いて

いた彼女は、「これはけっして私の間違いではない。この道に滑り込んだのはすべてこのご時世のせいなのよ！」と、自分の轉落した人生を告白した。〝私〟はこの不幸な娘を今の境地から救い出そうとしたいが、到底勇氣と力量はなかった。「私に彼女を沼地から救い出す力量がないならば、彼女のような不幸な人を見ないほうが良い。私は立ち上がり、電氣を消した。暗黑の中から夜明けを待つことにした」。

この第一人稱の〝私〟は、作者疑遲の面影を彷彿させる。「藝文志派」に集まった青年たちも、當時、疑遲の小說の主人公のように苦悶していた。これについては、古丁ら仲間と「藝術研究會」を組織した疑遲の回想から、才能を發揮できずにいる青年たちの姿を垣間見ることができよう。

都會の知識階級のほかに、都會に憧憬する田舍出身の若者の敗北を描いた作品もある。

「西城柳」では、金儲けできることを信じて都會に出稼ぎにきた盧振は資產家の家に住み込みで働く。しかし、若奧さんに誘惑され、欲のほしいままにされる。アヘンに犯された身體は次第に若奧さんを滿足させることができなくなった。彼に殘されたのは、田舍に歸らざるを得ない無一文の蝕まれた身體であった。

最後に、異國情調溢れる作品にも注目したい。

疑遲は若くして、ロシア人が經營した學校で學び、ロシア語を習得したばかりでなく、ロシア文學の影響も受けた。ロシア人の生活を熟知した經驗を生かし、第一次世界大戰時に、故鄉から追われたロシア人の流轉の生活を描いた「雁南飛」がこの一例である。エキゾチックな雰圍氣を作品に盛り込むこと、これも疑遲の作品の特徵と言えよう。

四　疑遲の作品の藝術性

疑遲の小説は、長編小説『同心結』と中編小説「雪嶺之祭り」以外、ほとんど短編ばかりである。もっとも讀者に讀まれ、評價されているのは「山丁花」を代表とする、東北の大地に根を下ろした鄕土を描くものだと言えよう。「北滿」でのさまざまな體驗が、疑遲特有の作風を作り上げ、同じ「藝文志派」の古丁や爵靑とは違った特色を示している。

同時期の作家陳因は、『滿洲作家論集』で疑遲の作風をこう批評している。(7)

> けっして浪費したり、誇張したりしない。常に華麗とは言えないような題材を選び、色のついていないペンで紙に書いている。夷遲は始終、自分が探し求めている素朴なテーマを選び、華麗で、不必要なものを取り除いている。(中略)
>
> 夷遲の筆は社會を付き破いている。その中から出てきたのは、美酒ではなく、苦汁である。以前、筆者は夷遲君をこう評價したことがある。強い筆致をもって、荒っぽいあらすじ、簡單な輪郭によって、立派な荒原の流民圖を仕上げている。また、冷たさと熱さを織り交ぜた血流によって、森林を開墾している群像圖を色づけた。前者は『北荒』のことであり、後者は『山丁花』のことである。

疑遲の小説は、常に悲しい大自然の描寫に精根を込めている。自然の嚴しさから、人々が置かれた生活環境がいかに冷酷であるかを引き出している。人々は苦難の中で喘ぎ、抵抗することの悲壯ささえも、ひしひしと傳わって

くる。

「北荒」の中で、胥昌の妻は夫の死後、追いつめられ、家を後にした。實家に向かう途中に「烏兒河」という河にたどり着いた。「深秋の烏兒河は穏やかで靜かである。雪に見舞われた眞っ白な大地は見渡す限り、果てしない。廣々とした河を、波が激怒するかのように引っかき回している。ビュービュー吹いている西風は、北の大地に無限な寒さを送り込んでいる」。

疑遲は「激怒するかのように引っかき回している」波や、「ビュービュー吹いている西風」をもって、胥昌の妻の前途多難さを暗示しているのである。

「塞上行」は蒙古草原を背景に、主人公が密かに復讐を心に祕めたことを設定している。

荒野に冷漠と凄涼が加わって夜が忍び寄る。ここには燐光もなく燈光の影さえ見えない。ただときどき遙かに遠く疲勞と悲哀を訴える馬の嘶きが聞こえてくるのみ。（中略）牧童が蒙古の竪笛を吹くと、「ヒューヒュー」と形容もしがたい哀調をおびた音を出す。これがこの荒野の上の、唯一の音樂であり、そしてこのメロディは、秋の病葉を偲ばせ、又家郷に在る白髮の母を思い出させるのだ。

この荒涼たる草原の描寫は、讀者に哀愁の念を喚起させ、牧童が吹く蒙古笛の音はあたかも主人公の鄉愁を表しているかのようである。

淪陷期東北文學の研究者黃萬華は疑遲の小說をこう評價している。(8)

作者は世間の苦難と關外の荒涼からくる悲愴、寂寞、憂鬱との融合を重視している。悲愴なまでに低く沈んでいる雰圍氣の中で、生命形態である生命感情、生命の智慧、生活の意志を輝かせるかと思うと、瞬く間に逝ってしまう。さらに、新鮮な題材選びに加えて、紙面の短い單純な構成の小説でも、より多くの人々に啓發を與え、藝術の力のあるものになる。內容が複雜で、人物間のもつれの多い作品でも、作者はストーリーを分かりやすく明快に處理している。

五　おわりに

疑遲が所屬している「藝文志派」は活躍した。脚光を浴びた作品は次から次へと日本語に翻譯され、當時の日本國內でも發表の場が得られた。疑遲の作品だけでも、「北荒」、「黃昏の後」、「梨花落つ」、「雁南飛」、「鄉仇」、「渡し」、「塞上行」が、日本語で讀むことができる。

「滿系」作家の作品集として、『原野』に續いて『蒲公英』が日本國內に上陸した。選ばれた小說は、古丁をはじめとする「藝文志派」のものが壓倒的に多かった。これに對して文學者の淺見淵はこう言っている。(9)

「原野」に收められている諸作品は、作家達がいずれも若いところから、未熟さや藝術味の乏しさは流石に目に付くものの、傳統を異にした大陸小說の流れを汲む構成の雄大さや、作中人物の縹渺感といったものが特異で、內地の人々が滿洲文學に對して關心を持ち出したのは、じつにこれがキッカケである。(中略)

次に滿系作家の文學は、選集の「原野」や「蒲公英」を通讀すると一應の輪郭が摑めるが、等しく現代支那文學の流れを汲んでいる。(中略)一夫多妻の封建的な家庭制度の崩壞氣運や、いくら稼いでも生活に追っ掛

けられている百姓の生活などを主として建國以前の滿洲を背景にして精力的に描いている。

その點、一般にまだ十分協和精神を出し切って居らず、題材的に稍々慊らぬものを覺えるが……。

建國理念や滿洲の新天地に燃えていた多くの日本人作家と比較すると、中國人作家は、「まだ十分協和精神を出し切って居」ない狀態であるばかりでなく、題材的にも社會の暗黑面を描くものがほとんどだった。しかし、作品は決して「建國以前を背景にし」たものばかりとは言い切れない。實際に當時の「滿洲國」の眞實の一面が反映されたものが多い。「滿洲國」の社會形態や中國人社會の種々樣を理解するための、貴重な資料を提供してくれている。

しかし、「滿洲國」後期の疑遲の作品は、時局とともに大きな變貌ぶりを見せている。その對日協力的な姿勢は多くの憶測を呼んでいる。太平洋戰爭が勃發した後、「滿洲國」內における取り締まりは一段と嚴しさが增していた。特に「藝文指導要綱」[10]の公布によって文學創作は一層自由がきかなくなってきた。一九四三年五月に一旦停刊していた文藝雜誌『藝文志』は、再び滿洲文藝家協會の機關誌として登場した。ここに發表された作品は藝術性が缺けており、戰爭に使われる道具にすぎなかった。「藝文志派」のメンバーは爲政者に擔ぎ出され、政府の代辯者役に扮していた。疑遲もこの場から逃れることができなかった。本當の感情を內に祕めた屈折した心情を否定できないだろう。

晩年に入った疑遲は、二〇〇一年、四五年ぶりに筆を取り直し、太平洋戰爭勃發後を背景にした「新京」にある横町〝新民胡同〟の物語を描いた。小說『新民胡同』（時代文藝出版社）がそれである。筆者はかつて『新民胡同』について、以下のように評したことがある。[11]

四十五年後に書いたまったく主旨の違った『新民胡同』では、讀者の目に映って居るのは、厭戰の日本軍、日本の統治への憎惡、日本からの開拓團に土地を取られることに怯えている中國人地主である。作家は高齡であるにもかかわらず、餘生に誕生させた『新民胡同』では、かつての對日協力への總決算と懺悔にもつながる。これは今まで不本意に書いた對日協力の作品が人々に與えた〝漢奸文學〟、〝漢奸文人〟とのイメージを拂拭しようとする必死の努力であろう。

疑遲は「藝文志派」とともに「滿洲國」に生き、「滿洲國」を書き、波亂萬丈な「滿洲國」時代を送っていた。中國國內では對日協力したことがある故に、「漢奸文人」と片づける見方や、または疑遲の早期作品ばかり取りあげ、東北鄕土文學の象徵と褒め讚えることもしばしば見受けられる。

「滿洲」關係の資料が大量に公開されている昨今では、我々はすべての事物と人物に對して客觀的に研究する條件を提供されている。そういう意味においては、疑遲が書き殘してくれた作品を讀むことによって、「滿洲國」の實態を、より的確に把握することができるようになった。疑遲の下層社會の人々に寄せた限りない同情と深い理解は、彼の作品の大多數を占め、疑遲文學の大きな柱になっていると言っても過言ではない。疑遲の複雜性は「滿洲國」の特殊性によって成されたものであろう。疑遲が若き情熱をもって書いてくれたその數々の作品は、間違いなく、今日の東北淪陷期文學研究の貴重な文獻となっている。

註

（1）上官縷「疑遲の鄉土小說」（『上官縷書話』吉林人民出版社・二〇〇一年所收）を參照。
（2）梁山丁「鄉土文藝與山丁花」（『明明』第一卷第五期・一九三七年）。
（3）陳因『滿洲作家論集』（一九四三年）、三一九～三二一頁。
（4）孫中田、逢增玉、黃萬華、劉愛華著『手かせ足かせをはめられたミューズ――、東北淪陷期文學史概要』（吉林大學出版社・一九九八年）、一一頁。
（5）疑遲「雜誌『明明』の回想」（『地球の一點から』第七六號、西田勝平和研究室・一九九三年）、四～五頁。
（6）同（4）、一七五頁。
（7）同（3）、三一八～三一九頁。
（8）同（4）、一八〇頁。
（9）淺見淵隨筆集『蒙古の雲雀』（赤塚書房版・一九四三年）、八八～八九頁。
（10）「藝文指導要綱」は一九四一年三月二三日に「滿洲國」弘報處によって公布された。政府の文藝政策が示された規定である。
（11）拙稿「疑遲の創作活動―『新民胡同』の批評を兼ねて」（大谷大學文藝學會『文藝論叢』第五十九號・二〇〇二年）、六～七頁。

（大谷大學助教授）